

第9回 スマートウェルネス三条推進会議(知的支援基盤)

1 日 時 平成 29 年 7 月 28 日(金) 午後 1 時 30 分～午後 3 時 30 分

2 会 場 三条市役所第二庁舎 301 会議室

3 内 容

(1) 開 会

三条市長の國定でございます。本日はスマートウェルネス三条推進会議に遠路はるばる三条市までお越しいただき、心から歓迎を申し上げたいと思います。また、三条警察署の皆様方からはいつも大変お世話になっているところでございます。本当にありがとうございます。さて、このスマートウェルネス三条推進会議について、我々は知的支援基盤ということで、全ての頭脳を委ねようということで、発足をさせていただいたところではありますが、これもかれこれ9回目の開催ということで、かなりの年月、それに伴って、ある意味でのデータの蓄積も少しずつでき始めているところがございます。私どもではこのスマートウェルネスの推進につきましては、当初から久野先生のお導きによりまして狭義の健康施策ではなく、広義の健康施策に持って行こうとハード・ソフト問わず、全てが健康につながって行くための施策を、ある意味有機的な連携の下、結び付けを行い展開していこうと、様々な試行錯誤を重ねてきたところでもあります。今日の会議の資料で事務局の方から説明させていただきますが、もちろん、全ての効果が出てきているわけではないかと思いますが、モデル地区としてスタートしました旧三条小学校区におきましては、1日当たりの平均歩行者数に確実に伸びが出始めたり、その中核となるべき誘発の場としての公民館事業でも、この2年の間に私どもとしては劇的な変化を遂げたりと感じておりますし、総体といたしまして要介護認定率が全国的には増加傾向にある中で、三条市では減少に転ずるといった一つ一つの外形的な効果も表れ始めていると感じています。これも、狭義の健康施策に振り回されることなく、久野先生のお導きによって、ある意味愚直にパッと見、こんなの健康施策と何の関係があるの？と揶揄されながらも取組んで来続けた成果がこうした形で表れ始めていると感じているところでもあります。こうしたことを振り返りつつも、また新たな指針をこの知的支援基盤を通じて、皆様方から大所高所の議論を通じて頂くことができれば、この知的支援基盤も大きな実りのある成果になるのではないかと考えているところでもあります。限られた時間ではありますが、皆様方と率直な御意見をさせていただければと思いますので、よろしく願いいたし

ます。

(2) スマートウェルネス三条の取組について

【久野議長】

それでは、議事に従って進めてまいりたいと思いますが、今、國定市長からの御挨拶の中にもありましたが、せっかくの機会ですので、形式的ではなく、三条市がずっと進めてきた日本の一つのモデルにもなっている「三条に住むと自然と健康になる」というまちづくりに関して、どこまでうまく行って、今ほどの話にもありましたとおり、明らかな成果が出ていると。一方でまだゴールではない部分もあるので、再度ゴールがどの辺りにあって、ギャップがどの辺りにあるのかということについて見える化できれば。その上で今日の議論が来季の事業にうまく反映されていくきっかけとなるのが、本日のアウトカムかと思えます。委員の皆さんからはそれぞれの専門的な立場から御意見、御指摘をいただければと思います。市長さんが近くにいらっしゃいますが、遠慮なくお願いしたいと思えます。良いことだけ言うのは禁止でお願いします。いい政策作りの観点で、耳の痛いこともきちんと発言願います。

では、三条市の方からこの1年の取組について、成果と課題、我々委員会の方にアドバイスいただきたいという内容についてプレゼンをお願いします。

【山村課長説明】別紙資料のとおり

資料 第9回スマートウェルネス三条推進会議

- ・課題1 これまで外出しなかった人を外に上手く外出させるために効果的なアプローチ方法
- ・課題2 外に出てきた人に対して他の参加者との交流を促すために仕掛けられる工夫
- ・議題3 自主的なグループ活動へ促すための効果的なアプローチ方法
- ・議題4 住民主体のグループ活動を継続して行うための行政の関わり方・成功事例

【久野委員】

4つの課題解決については、後で議論をさせてもらいたいと思えます。まずは各委員の方々からどの点でもいいので、御指摘、アドバイス、あるいは御質問があればお願いしたいと思えます。

まずは村山委員からお願いいたします。

【村山委員】

前の会議から時間も経っており、思い出すのに時間がかかるのですが、まず、ターゲットとしているのが無関心層 7 割ですが、その無関心層の定義が「運動に取り組む意思があるが活動は活動していない」とか「運動に取り組む意思はない」ということですが、16 ページの成果が一つの指標だと思うのですが、この中で 7 割層がどれだけ動き出したかは分かるのか。

【山村課長】

具体的に 7 割層だった人が外出したかという調査は行っておりません。そういった意味で抽象的な表現にはなっていますが、全体としては増えており、これは推測にはなっていますが、7 割層が動き出した“可能性”があるのではないかと考えています。

【村山委員】

平成 26 年の段階で 84%の人がすでに外出しており、週 1 回も外出しない人はそんなにいないのではないかと思います。このことから、指標として例えば、運動に取り組む意思はなく活動していない人がどう変化したかという集計はないか。

【山村課長】

具体的に他に指標があるかということでございますが、そうしたものを捉えた数値はございません。

【久野委員】

表の枠外を見ると、対象者が「一般高齢者」と「要支援 1・2」となっていますので、これを分けて見ていくともう少し様子が分かるのではないかと思います。つまり、要支援 1・2 である程度虚弱になってきている方々が動き出したという意味合いが出てくれば。一般高齢者だと元気な方々なので、そうなれば週 1 回くらいは外に出てくるだろうと考える。質問そのものが週 1 回でいいのかということも、今後もし調査をするのであれば、国立長寿研の調査では週 3 日以上外出している人の健康度が高いというエビデンスが出てきているので、週 3 日以上を聞けば、指標になるのではないかと思います。ただ、このデータは今まで取ったものであるため、変えるチャンスがあれば対応してもらえればと思います。

【田中委員】

今の報告を聞いて、三条市の皆様は大変だなと感じました。これだけの事業を行っているわけですから。その中で、16 ページの週 1 回以上外出という部分ですが、調査

を行った際に週1回、週1～2回、3回～4回など細かく調査は行っているのか。また、外出の目的という部分は取っているのか。

【山村課長】

29年度については「週1回」「週2回から4回」「週5回以上」という内容で行っております。ただし、26年度はそういった聞き取りを行っておりませんので、比べる数字はありません。さきほど久野先生がおっしゃられた一般高齢者と要支援1・2という部分では、今後集計を行うことはできるとののではないかと考えております。

【田中委員】

対象は65歳以上ということですので、たぶん仕事はされていない方だと思う。たとえば働き盛りは月曜から金曜まで仕事に行っているわけですが、そうすると土日しかないわけで、そうした現役の方が参加できるようなイベント増やすことは考えているか。

【山村課長】

そうした視点も考えており、平日は気軽に参加できるものを中心に、土日には普段仕事をされている方が参加しやすいイベントとしてコンサートなどを行っております。

【久野委員】

今回の報告と狙いというのは、高齢者の部分で明確に示されており、分析もされている。今後の展開の中で、今は高齢者をうまく引っ張り出すことを継続していくことに関してはまったく同意である。一方でこれから高齢者となっていく人達に対するアプローチは何か考えているか。私は、メタボの検診の時に同じことを感じるのですが、検診でメタボを見つけて保健指導を行っていますが、これを私は「モグラたたき」と言っている。スマートウエルネスの発想はメタボそのものを減らしていくこと。減らさなければずっとモグラをたたき続けなければならない。その為には、狭義の健康施策だけでは厳しいので、こうしたまちづくりの取組を含めた中でメタボ層を減らそうというものだと思う。現在人生80年、90年と言われている中で、65歳から考えても地域で暮らす時間が20年～30年あることになる。そうした中で現役をリタイヤした層を引っ張り出そうとすることはもちろん大事だが、今働いている層がリタイヤした時に自然と地域で活動できるような仕掛けもそろそろ必要なのではないか。先日高松さんが日本に帰ってきた際に議論を行ったのですが、ドイツと日本の差は、ドイツの方々は働きながらコミュニティへの参加も同時に行っている。リタイヤしてからどう

するではなく、働きながらコミュニティへ自分の居場所を持っているので、リタイヤしても自然と次につながる仕掛けが出来ている。三条市ではこれだけの取組を行っているのだから、中小企業と連携して、働いているうちからこうした取組に参加する仕掛を行ってはどうか。そうすることで将来の担い手にもなってもらえると思うが。

【山村課長】

たとえば、ステージえんがわで行っているイベントでは、高齢者だけでなく、様々なイベントを行っています。もちろん高齢者向けのイベントも行っていますが、子どもから大人までが参加できるイベントも行っていますので、そういった意味で高齢者に特化しているわけではありません。

【久野委員】

攻めているわけではありません。三条市がこれだけイベントを行っていることは十分理解しています。その中で三条市にはたくさんの中企業があるわけで、たとえば企業の社員の方々が社会参画できる具体的な仕掛けというものを施策として考えているかという質問です。

【山村課長】

働いている人に対して具体的に施策として参加を促す取組を行っているかという部分については、行っておりません。

【久野委員】

政策的な判断で、もう少し高齢者を対象に取組んでからということであれば、お考えいただければと思いますが、いわゆるモグラそのものを減らしていくという発想をどこかのタイミングで考えていく必要があると思います。

【國定市長】

大雑把に言えば、三条市は都会と違う。60歳になったから、65歳になったからリタイヤする、だからその時までには何とかしなければというのは、論点として三条市においては相当ピントが外れている。三条市はものづくりのまちで、労働基準監督署から睨まれ続けているまちなので、働かされ続けているわけです。なので、リタイヤという概念が都会ほど厳格ではない。他方で役所みたいに厳格に定年退職制度を設けているところでは、退職した瞬間に地域から自治会長・民生委員など引く手あまたな状態になる。そこから逃げ回るのが精一杯というのがこのまちの実情です。私は少なくとも今の現役世代に対して積極的にアプローチして行くのは、労多くして得るものが少ないと考えている。他方で、定年退職後に逃げ回っている人達に声がかからなくなるくらいのタイミングがあるわけで、そこはいかに維持していくのか、あるいは、今

の瞬間すでに引きこもってしまった世代をいかに外に引きずり出して次の世代にスムーズにバトンタッチしていくのかということが今の三条市に求められている段階だと思う。そうすると、17 ページにあるセカンドライフ応援ステーションの取組は、まさにそこが言えると思っているが、私たちはドイツにはなりきれないので、社会としての ON・OFF がはっきりしている日本で、そのスイッチを緩やかにしていくためには何をしていったらいいのか、いきなりガツガツやって行きたい人もいるだろうし、一人になると寂しくなるのでそうした人たちに趣味の場や外出する機会を与えましょうと。カンドライフ応援ステーションは始めてから 2 年経過していますが、平成 27 年の 7 月からスタートし、人材登録者数、マッチング件数について、65 歳くらいだとまだ地域で引く手あまたなので、70 歳くらいの層で増やしていくということが、今の三条市にとって大きな課題だと思うし、そっち側に軸足を置かないと面としての広がりを見せて行けないというのが率直な感想です。

【久野委員】

あとで田中委員から説明があると思いますが、三条市では介護費や国保のデータが良くなってきている中で、協会健保のデータを見ていたら、働き盛りのところのデータがあまり良くないので、そうした視点も必要ではないかと感じた。

【國定市長】

このまちは現役世代が働かされ過ぎです。

【久野委員】

それでは、次に小田代理委員の方から、特に専門のデマンドの部分や道路使用の関係、それ以外でも結構ですのでよろしくお願いします。

【小田代理委員】

交通関係でお話しさせていただければと思います。三条警察署では、スマートウエルネスの取組においては「ゾーン 30」ということで取組に相乗りさせていただいているところでもあります。また、さんちゃん体操の場にお邪魔して高齢者に交通安全の啓発をさせていただいたり、マルシェにおいてもパトカーの展示を通じて交通安全の周知をさせていただいております。交通関係を考えますと、新潟市では BRT など目を引く取組がありますが、三条市においては走りにくい道路という声が多く、第一産業道路、第二産業道路では慢性渋滞など難しいと感じています。そんな中でデマンド交通ということで、高齢者が免許返納した際の交通の確保に取り組んでいただいております。また、工場の祭典でも 2 人乗りの自転車でしょうか、そうした面白い取組もどんどん広がってくれればと感じています。交通関係においても高齢者問題が一番の課題

であります。交通事故では高齢者が関係する事故がずっと半数を占めておりますので、高齢者の方に対しては、積極的に免許を返納するよう促しています。そうした意味で市や包括支援センター等と連携を取っていかなければならないと考えております。

【久野委員】

高齢者はいつか車に乗れなくなる時期が来ますし、認知症の問題などもあるかと思えます。20 ページの高齢者実態調査結果の部分で、交通手段がないという結果が若干なりとも増えています。また、足腰の痛みという部分も3割程度いる。交通手段に関しては改善されていないという部分をどのように考えていて、今後どのような対策を検討されているのかお聞かせいただきたい。また、足腰の痛みに関しても何か対策があるのか、この2点についてお聞かせください。

【小林課長】

平成26年の結果10.8%に対して平成29年は13.0%ということで2.2ポイントの増加となっておりますが、先ほどの小田交通課長からのお話のとおり、市ではデマンド交通という施策を行っており、さらには平成28年から複数乗車に対する優遇制度「おでかけパス」という取組も行っております。そういった意味で、制度がゆるくなったということはないと考えています。このことから、単純に高齢者の数（層）が増えたことによるものと感じています。その他に考えられる要因として、デマンドバスについては低床化が進んでいないので、そうしたバスに乗りにくくなった方々がもしかすると、1ポイント位は影響があるのかもしれませんが、高齢者の分母数が増えたことが大きな要因ではないかと思えます。

【飯田主任】

健康づくり課では「ちょこっと筋トレ」という事業を行っており、新潟医療福祉大学の教授からメニューを考案いただき、地区組織の健康推進員の協力を得ながら数種類のメニューを日常生活の中で取組んで行くという形の筋トレメニューの普及を行っております。目的としましては、生活習慣病予防と介護予防の両方ということで、協会健保さんとも連携しながら企業の方にこの筋トレを進めたり、地域においても出張トーク等の機会を通じてちょこっと筋トレを進め、足腰の痛みを予防、動くための筋肉づくりなどのアプローチを行っております。現在、筋トレメニューも第二弾に改良を行い、その普及啓発に取り組んでいるところです。

【久野委員】

小田代理委員にお聞きしたいのですが、国の方で自転車活用推進法が通りましたが、歩いて移動だけでは困難なわけで、デマンド交通という取組もありますが、やはり自

転車というものも活用される一つの方法かと思う。そうした中で、三条市における今の課題など感じていることはありますか。また、先ほど高齢者の事故の問題がありましたが、高齢者による自転車事故などについてもお聞かせいただきたい。

【小田代理委員】

高齢者の自転車乗りほど怖いものはありません。交差点では止まりませんし。自転車に乗れば車の仲間なわけですが、利用する方々が交通ルールを知っているのかということに関して非常に不安を感じています。確かに、自転車に乗ることも健康にもいいですし活用することは非常に良いことだと思いますが、交通ルールを守り、交通安全があつての話だと思います。

【久野委員】

皆さんから一言ずついただきましたが、何か追加でお聞きしたいことや、御指摘などがあればお願いしたいと思います。

【田中委員】

14 ページに関連して、現在設定されているエリアの中に公園というものはいくつくらいあるのか。詳しい数が分らなければ結構ですが、もしそういった公園がいくつかあるのなら、高齢者を対象に公園に来てもらってラジオ体操を行うとか、ちょこっと筋トレなどを行ってはどうか。これから夏休みになると子供たちがラジオ体操を行うが、中国ではよく公園で運動を行っている。そういったものをうまく利用しながら、引きこもっている高齢者の方を一步外に出すというやりかたはどうか。

【近藤部長】

健康の観点、体を動かすという観点でお答えさせていただくと、このエリアの中で公園というと、たとえば、八幡宮であったりお寺や神社に広場があつて、こうした場で地域の方はラジオ体操などされていると思うが、えんがわの方でも市日の時にラジオ体操を行うなどの模様しもされている。また、このエリアは弥彦線の高架下が通っており、日常的に雨も当らない場所なので、散歩されている方が大勢いることから、エリア自体が歩いて暮らせる場となっている。そういった意味で、日常的に体を動かすことが行われていると捉えている。

【久野委員】

それに関連して、23 ページの課題に対してお願いしたいと思います。「これまで外出しなかった人（※特に男性）を外にうまく外出させるために効果的なアプローチ方法」については、今ほどの田中委員の発言は一つのアイデアだったと思いますが、何かほかにアドバイスなどありますか。

【村山委員】

3 ページのところ、男女での動機づけが示されていますが、男性の1位が知識、第2位が物（金）となっており、そういった意味で、皆でワイワイというより、知的な好奇心を満たすような取組の方がいいのだらうと思う。また、私は新潟市で生涯学習の講座を担当していた時に、圧倒的に男性は歴史が好きな傾向がありました。（逆に女性はあまり好きではない）やはり、男女では全く違うのだと思う。また、先ほど小田代理委員から高齢者は交通ルールを知らないのではないかという意見がありました。そういうのも講座として成り立つと思う。自分の身を守る知識という意味でコンテンツとしてあり得ると思う。

【小田代理委員】

これから多くなるのは、免許を持っていたのだけど返納により持たなくなる方、ある意味交通ルールは知っていると思う。昔よりはマナーは良くなっていくと思う。

【久野委員】

②・③・④の課題、どれでも結構ですので、御意見をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

②の参加者との交流を促す方法、③自主的なグループ活動を促すアプローチなどは村山委員の方で何かご経験があればお願いしたいと思います。

【村山委員】

どちらかと言えば③・④に関することですが、やはり、住民の方々がやりたいことでないと発展できない。促すというより、やりたいことを引き上げる方法だと思う。活動している人達をキャッチしていくやり方でないと。行政が促しながらやりましようと言っても、そもそも考え方が違うと思う。私はこれまで健康づくりを食の面から行ってきて、行政とも関わってきましたが、どうしても行政目線で「こういう食事をしてほしい」、「こういう講座をやきましょう」となりますが、このところ子供食堂の動きが活発で、新潟市ではこの2年間で16か所に増えている。それは、私たちがやってくださいとか、やりましようとは一言も言っていないのに、地域の皆さんは皆やりたいと言っている。あまりに増えてきて、むしろ衛生的に大丈夫だろうかなど心配になるほどだ。その動機の一つは、人のため、子どものために何かやりたいというのが動機づけになっている。それは男性でも同じで、昔調理をやっていた人などは張り切ってやっている。一つのヒントとして、“誰かの役に立つ”ということと、“自分たちでやりたいと思うこと”が重要だと思う。

【山村課長】

感想になるかと思いますが、④について、どうしても行政が主導して事業を立ち上げていくと、どうしても行政主導が続き、いつまでも関わりを続けなければならなくなってしまう現状があり、今ほどの住民がやりたいことを引き上げる発想と、誰かのために役に立つという視点は非常に大切だと思う。活かせる方法を考えて行きたいと思います。

【村山委員】

④をもう少し申し上げると、新潟市は子ども食堂が16か所立ち上って「子ども食堂ネットワーク」というものを作った。それも自主的にネットワークづくりをしようという動きが出てきた。なぜそういった動きがでてきたかという、次に子ども食堂をやりたい人が出てきた時に役に立ちたいという気持ちから。もう一つは困っている事を話して一緒に解決したいということ。そういったグループ同士のネットワークが必然的に出てくる形になるといいと思う。それらに対する専門家の関わり方としては、研修会を頼まれたり、子ども食堂であれば衛生面での助言や献立の作成など。

【久野委員】

その辺の仕掛けは新潟市が作ったのか。また、組織化されていたり費用面などはどうなっているのか。

【村山委員】

市は全く関係ない。自走的に動いているものです。組織化については、ネットワークは組織化されており、事務局も存在している。費用面ではネットワークに関しては一切かかっていない。ボランティアで行っている。会議の場所が無ければ大学や社協などを利用している。個々の子ども食堂は、食材は農家さんやフードバンクから提供されてくるが、一人1,000円の参加料の中で全てを賄っている。

【田中委員】

子どもをお持ちのお父さん、お母さんは、土日になるとサッカークラブや野球に行く人が多い。そうした子供たちが運動しているところを活用して高齢者を引っ張り出せないかということが一つと、高齢者の方は子どものためなら動くと思う。たとえば、紙芝居の会とか昔話などを公民館で開いてはどうか。高齢者の方が社会に出て役に立つということを見せる場を作ったらどうかと思う。

【小田代理委員】

私も色々なイベントに参加させてもらってきたが、やはり男性の参加が少ないというのは感じていた。昭和の自動車展は男性に響く良い取組だったと思う。男性参加を増やす何かいい方法はないものか。非常に難しい。

【久野委員】

それでは、課題については一旦ここで終了させていただき、最後に時間があれば再度お聞きしたいと思います。

では、本日、田中委員から三条市のデータをお持ちいただいたので、その資料について説明をお願いいたします。

【田中委員】

—三条市の健康データと職場の健康づくり事業について—
別紙資料に基づき説明。

【久野委員】

詳細なデータありがとうございました。三条市側で何か質問があればお願いします。

【國定市長】

11 ページ以降のグラフは内側へ行くほど良いということか。そうすると、14 ページで見ると新潟支部全体と三条市を比較しているわけで、34 歳～39 歳がやや、三条市が悪くて、60 歳～74 歳も若干悪い。40 歳～59 歳がほぼイコールになっているが、新潟市は新潟支部全体の何%を占めているのか。都市部と農村部では生活スタイルが全然違う。

【田中委員】

今の新潟市で 23 万人です。

【國定市長】

全体が 81 万人なので、4 分の 1 強を新潟市が占めているということになる。なかなか想像できないが、歩行の部分で、新潟市以外で支部全体より良いところはあるのか。新潟市のような都市部では出勤そのものがバスを利用することが多い。そうしたスタイルが成立している場所は県内では新潟市ぐらいしかないのではないかと思う。私もふれあいトークで良く話をするのだが、私も何もしないで一日過ごすと 2,000 歩いかない。それは、生活習慣のアベレージがそもそも違うから。もっと言えば東京とかでは、普通に生きて行くだけで 1 万歩位歩かないと生活ができない。新潟市内も公共交通に依存している人が多ければ、そもそものアベレージが高いはずである。そう考えると、三条市と新潟支部を比較して土ですと言うのは、三条市の水準をどこまで正そうとしているのかを考えると、少しどうかなと思う。なので、新潟市以外のところと比較をした中で、まだまだ三条市は低いよということになれば、“そうですね”

とうなずける。

【田中委員】

今後、そういった形で出すようにしたいと思います。

【國定市長】

あくまでも、実際の病気における医療費が最後のゴールであると思うが、スマートウェルネスそのもので言えば、基本は運動。プラス食について“どうやって改善していきましょうか”というのが本題なので、どちらかというところ、ここで言えば歩行と、週1回以上の運動、あと補足的に食事関係のところ、いわゆる三条市レベルの生活習慣を送るような都市空間において、どれくらいの差が出てきているのかということの方が関心があります。

【田中委員】

市長が言われたように佐渡市ではほとんど歩くことがありません。軽自動車は7割以上普及しており、佐渡市の検診のリスクはすごく高い。新潟市の平均値を全部越えている。だからこそ運動しなければならない。

【國定市長】

もちろん。その通りだと思います。そこを否定しているわけではなく、アベレージが違うので、もともとアベレージが違うところを“違うでしょ！”と言われても、それはそうに決まってるとなってしまう。むしろ、三条市で言えば新発田市や柏崎市、それに長岡市、上越市も公共交通だけで生きている人は、すごく少ないと思う。その辺りと比べるとリアリティが出てくると思います。

【久野委員】

ありがとうございました。それでは、今のリクエストも含めて、経年的な変化を見て行けると良いかと思しますので、よろしくお願いします。

それでは、私の方で用意した資料について、最近我々の方で行っている動きをご紹介させていただきます。

(3) 「SWC取組における最新トピックスの紹介」

【久野委員説明】

—健康寿命社会を実現する3つの社会技術の開発— ※別紙資料のとおり

【久野委員】

終了予定時刻となりましたが、最後に全体の議論、ディスカッションを通じて各委

員から一言ずついただき、最後に國定市長からコメントいただければと思います。

【村山委員】

本日の報告を聞き、三条市は様々な取組を精力的に行っているなーというのが実感でした。ただ、これは行政側から見たプレゼンでしたので、市民側から見たプレゼンにしたらどうなるか関心があり、こういう会議に市民側からのプレゼンも一緒にあると、私たち自身も実感としてどういう影響があったのか知ることができると思う。

【田中委員】

私も、三条市はこれだけの事業を行っている中で、市民の方がどう感じているのか、タウンミーティングではないが、そういった視点を取り入れていくと、もっと良くなっていくと思います。

【小田代理委員】

警察としても、三条市と連携・共同で施策を進めてまいりたいと思います。今後とも宜しくお願いします

【國定市長】

今日も色々と御指摘をいただきましてありがとうございました。ある意味出口の見えない暗中模索を続けて10年近く経過をしているわけですが、「ますます迷い込んでるなー」というのが正直な感想でありまして、たとえば、御指摘いただいた市民というのは実はすごく難しいです。市民と語り合えようといった時に現れてくる市民というのは、3割層の市民なんです。その人達は、言えは率直な意見を言ってくれるし、前向きなこと、厳しい意見を言ってくれます。でも、そうした意見に“ビビッ”とくる人達は、結局3割の人達であって、7割に届いていないというのが日々の実感としてあります。私もタウンミーティングみたいなものを続けて行っていますが、最後は1会場当たり2人しか来なくなった。それで一旦やめて3年位経ってから、また始めたのですが、もうどうにもならず、自分だけの力では人が集まれないので、伊勢みずほさんの力を借りて、“伊勢みずほさんを見るために来る。”来たら三条市政が講義として無理やり付いてくるという姿を整えるのですが、それでも130人位である。昨日行った時は、住みます芸人の三条市出身の関田君という吉本芸人がいるのですが、30人位でした。結局こんなものなんです。ですので、そこに参加してくれた人達をもって“市民”と捉えられるかということ、すごく難しい。だからこそ首長がいて、議会議員がいるということに繋がっていて、目に見えない空気感みたいなものを感じるのは誰かということ、最終的には私たちだと思っています。また、市民と交わったから全てが分かるかということ、それはそれでハリボテ感があると感じており、ますます暗

中模索に陥っていると感じています。他方で、やればやっただけ変化が訪れているということも事実でありますので、歩みを止めるつもりは全くありませんし、市民活動を行っている代表選手、あるいはそこに参加している方を代表選手にしてプレゼンを行うことは大いに良いことと思いますし、そういった積み重ねが必要なんだろうと思います。また、もう一つは過去のことを評価した方がいいんじゃないかと最近思うようになってきて、事務局は説明を流しましたけれども、暮らしの場で気付いた時には三条市に102か所も通いの場があった(11ページ)というのは、結構すごいことだと思っていて、たとえば、子ども食堂さんが2年間で16か所になったというのはすごいことだと思います。でも、たかだか10万都市で、気が付いたときには102か所も月に同じ場所で2回以上活動しているカウント数なわけです。ここに行政はほとんど関与していないわけで、地域の人達が自ら行ってられるものがベースとして102もある。ここにもう少し評価をしてあげるべきではないかと思う。もちろん、新しい取組もどんどんやって行く必要もあると思っていますが、過去から築き上げられてきた大切な資産というものにプラスの評価をし、できればここを拡大目標として172か所を目指していますが、先ほどからご指摘いただいているように行政主導ではないものにできればいいと思っています。

逆にネガティブな話をすると、私は人の作り方という部分では十日町は上手だと思っている。恥じらいなく言えば、三条市も上手な方だと思っているが、三条市の響き方は若年層に響いている。“マルシェ”や“ステージえんがわ”などでがんばっている人達を見ても30~40代なんです。でも、十日町では60代、70代の人達が三条市という所のまちづくりの先端を走っている。しかもボランティア精神で。そうした尖った3割層が三条市にはあまりいない。卵が先かニワトリが先かという話になってしましますが、ここ数年は行政主導で様々な取組を行ってきたので、なんとなくお客様意識が根付いてしまっていて、“場”というものは通うものであり、仕掛けるものではないというものが今限界を迎えつつあるのではないかと感じている。もし、話を聞く機会を設けるのであれば、私のリクエストとしては、うまく仕掛けてある十日町の“おじちゃん”“おばちゃん”の話とか、村山委員からお話しいただいた新潟市の子ども食堂で自発的に取り組み始めた人からのお話を聞くのが面白いのではないかと思う。あと、行ったことはありませんが、大分の“豊後竹田のまちなみ”という、見ただけで「ここ使えそうだな」と思うくらいにまちが小さいので、旧三条小学校区みたいなところに公共施設や公園、市役所機能などが凝縮されている。あそこは何をやっているのだろうかと行ってみたいし聞いてみたい。そうするとハードとソフトがどれだけ

結び付いているのかの一端が見えてくると思う。色々と言いましたが、結論からすれば最初に気づいた人がやるべきであって、三条市の場合は行政が先に気づいてしまっているの、相も変わらず行政主導でやっていこうかと考えていますので、そういった観点で様々な御意見をいただければと思います。本日、刺激を受ける時間をいただきました。引続き御指摘をいただければと思います。ありがとうございました。

(4) その他

—特になし—

(5) 閉 会 (15 : 15)